

監修の言葉

羊土社から既刊「Dr宮城の教育回診実況中継」の第2弾とも言うべき「Dr.宮城の白熱カンファレンス：診断のセンスと臨床の哲学」が岡田優基先生の筆により発刊されることになった。

このたびは、呼吸器疾患以外の症例を中心に私との教育回診の内容を記した記録集である。第1弾は中部徳洲会病院に勤務していた重森保人先生による記録集で、主に呼吸器疾患を取り上げた症例検討の内容が中心であった。

この第2弾は群星沖縄の参加病院の一つである、おもと会：大浜第一病院において初期研修医として勉強に励んでおられた岡田優基先生が、研修中（2008～2010）の2年間に行なわれた7つの基幹型病院における教育回診のなかから11例を取り上げて、その内容を克明に収録し、いろいろな角度から必要に応じてこれを補填し、文献検索を加えて稿を起こしたものである。

岡田優基先生は大阪市立大学出身であるが、徳田安春先生の勧めにより、日本最南端の沖縄に来島し、研修を受けることになったものである。

監修するにあたって、その内容を読んでみると、徳田安春先生の直接の助言が功を奏したであろうことは論を俟たないが、岡田優基先生がこの稿を起こすにあたってのエネルギーの凄まじさには驚きを感じざるを得ない。

私がカンファレンスで述べた一言、一言を丹念に記録しただけでなく、その文献的裏付けを探り、かつ、筆者の発言の不足部分を緻密に書き加えるという手法でこの本を完成させている。

症例そのものは11例と少数に留まっているものの、その内容は岡田先生の精力・努力により、症例ごとに読み応えのある深い内容を藏した記録集となっている。一研修医であった岡田先生が症例検討の対象症例の一例、一例をこのように深く掘り下げて見ていく臨床家としての姿勢は実に見事である。

現在、臨床教育に携わっている指導医自身が、このような研修医達から多くの刺激を受け、啓発される姿がこの本を通じて垣間見えてくる。

研修医達は絶えず「What to learn and how?」を追求し、指導医達は「what to teach and how?」を求めるなかから「啐啄同時」の真の教育哲学が生まれてくるのだと信じて疑わない。

この本の出版に当たり、多大な労力を費やしてきた羊土社編集部の吉川竜文様、保坂早苗様には心から感謝の意を表したい。

2014年9月

群星沖縄臨床研修センター

宮城征四郎